トルーマン・カポーティーについての考察

佐々木　陽　子

「神は、才能を与えてくれるが、同時にムチも与える。このムチは、自分を自分で苦しめるためのみに与えられたものである。」カポーティーは『カメレオンのための音楽』の中で、こう語っている。つまり才能を持って生きること—彼にとっていえば、文章を書くという行為—は、非常につらいものであったようだ。

ニューオリンズで生まれたカポーティーは、ひとりっ子として育てられた。両親は彼が四歳の時に離婚し、その後彼はルイジアナ、ミシシッピー、アラバマの田園地帯にある親類の家を転々とした。彼はその頃から自分一人で本を読むことを覚え、それが彼にとって学校教育よりも重要であったため、十七歳で学校をやめてしまった。

彼は南部にいた頃に、普通の人間より早い時期でものを書き始めた。八歳の時のことだった。多くの親類に囲まれて暮らしていたが、自分で自己を形成してきた。だからこそ、書いたものは決して教師には見せず、ただ憑かれたように毎日規則的に文章を書いていた。

彼と同時代の作家ウィリアム・スタイロンは、まだ若かったカポーティーがすでに充分成熟した姿で文学の世界に登場したことに感銘を受け、彼のことを「人並みはずれて才能のある作家、まだ選挙権を持つ年齢に達していないのに、すでに成熟した言葉の使い方を習得していた」と語っている。スタイロンをして彼にそのようにいわしめたカポーティーの人間性は、彼の作品である『ティファニーで朝食を』の主人公ホリー・ゴーライトリーに、強くうつし出されていると私は感じる。ホリーの複雑な過去と処世術、それらはカポーティーの生き方によく似ているからである。

彼の初期の作品の底に流れているモチーフは、ある意味での平静さの追求、そしてある特殊な種類の愛情の追求であり、それこそが、彼が必要とし、求めていたものであったといえる。そしてそれは、ホリーが求めていたものと確かに一致するのである。

カポーティーの小説の特色は「孤児」の文学という点にある。処女長編『遠い声　遠い部屋』のジョエル少年、『ティファニーで朝食を』のホリー、『草の竪琴』のコリン少年、そして遺作となった『叶えられた祈り』のP・B・ジョーンズ。カポーティー文学の本質は、見捨てられた、傷つきやすい「孤児」の文学なのである。両親に捨てられた子供、周囲との異和感に悩む子供、自分は誰にも愛されていないと思い悩む子供—そうした孤独で疎外された「孤児」こそがカポーティーの原イメージにあるといえよう。

（指導教員　中村　敦志）